

令和7年度環境経済委員会行政視察報告書

環境経済委員会

委員長 白鳥 誠

【視察日程】 令和8年1月19日（月）

【視察委員】 委員長 白鳥 誠
副委員長 須藤 博文
委員 山崎 真彦、渡辺 忍、椛澤 洋平、蛭田 浩文、
櫻井 崇、森山 和博、三須 和夫、石橋 毅

【視察地及び調査事項】

1 株式会社MOWG

(1) 本市農業をけん引する農業者の理念及び経営戦略について（現地視察）

2 合同会社TheTatsukoFarm

(1) 本市農業をけん引する農業者の理念及び経営戦略について（現地視察）

3 千葉市農政センター

(1) 農政センターの機能強化について（現地視察）

1 株式会社M○WG

調査目的	本市農業をけん引する農業者の理念及び経営戦略について確認するため、現地調査を行う。
視察概要	<p>1 調査項目 本市農業をけん引する農業者の理念及び経営戦略について</p> <p>2 対応者 株式会社M○WG 代表取締役 山下 大輝 氏</p>  <p>【若葉区野呂町の圃場を見学】</p> <p>3 主な質疑応答（□：質疑、■：答弁）</p> <p>□ビニールハウスの設置に活用できる市の補助金はあるか。 ■未来の千葉市農業創造事業補助金を活用して設置しており、おおむね2分の1の補助率である。ビニールハウスの費用も高騰しており設置が難しいと県外の農家と話すこともあるが、千葉市は補助金があるので活用している。</p> <p>□ビニールハウスの維持管理に必要な費用や補助について伺いたい。 ■加温していないので維持の費用はあまりかからない。ビニールのくもりを気にする人は張り替えを3、4年で行うこともあるが、現在栽培している葉物は多少くもっていても成育に影響はないので、ビニールが破れるまで使用すると考えると、10年ほどは使用できる予想である。張り替えは外部に依頼すると1棟当たり30万円から40万円ほどの費用がかかると思われるが、自分たちで張り替えれば約半分の費用でできる。ビニールの張り替えにも補助があれば大変ありがたいと考えている。</p>

- 事業拡大のために今一番必要なものは何か。
- 農地の拡大及びハウス増設が現在投資していくポイントである。野呂圃場の農地も農地利用最適化推進委員が見つけてくださった。高齢で農業を引退する方の情報をいただくこともあり、大変助かっている。
- 有機JAS認証やみどり認定を取得する上での困難や課題はあったか。
- 有機JAS認証は使用できる肥料等が限られているため、認証に適合する堆肥を探すことが大変だった。栽培については最初から生産工程の記録をつけていたため問題はなかった。
- みどり認定についても、基本的に環境への負荷が少ない農業という経営理念で始まっているため、申請において大きな負担はなかった。
- 学校給食に有機農産物を活用してほしいという思いがあるが、生産者側としてはどのように考えるか。
- 現在、畑町と野呂圃場を合わせて有機栽培のハウスが48棟あるため、毎日の出荷は難しいが、月に1回程度であれば対応できると思われる。夏季はホウレンソウの栽培ができなくなり、コマツナの割合が増えるため、他のスーパー等へのお荷のバランスも考えて、コマツナを学校給食に出せると大変助かる。
- 花見川区の小学校では生産者出張授業を行っている。
- ※生産者出張授業：小学校給食の共通メニューの日に合わせて、その日に使われる地場農産物の栽培方法や流通、千葉市の農業の概要、栄養などについて、生産者、JA職員、市の職員が小学校に出向いて説明を行い、児童と一緒に給食を食べて交流を深める。地産地消の推進・食育活動の一環として、生産者と消費者の交流の場を創出し、「食」と「農」に対する理解と関心を深めるために実施。
- 1月に千葉市の食のブランド「千」に認定されたが、千における自社の農産物の販売方法について要望はあるか。
- 認定を受けたばかりで、認定証授与式も今後の予定であるため、具体的な活用方法については十分にイメージできていない部分もあるが、やはり千葉の農産物をより多くの方に購入していただけるような取組にしたいと思っている。
- ふるさと納税の返礼品の話もあるが、我々単独ではコマツナ10袋などになってしまうので、消費者のニーズに沿うには千の他の認定品と組み合わせるといった発想がよいのではないかと。収穫体験というパッケージもよいと思う。
- 有機栽培に限らず、新たに作っていききたい品目や千葉市の名産として力

	<p>を入れていきたい品目はあるか。</p> <p>■赤水菜を少しずつ広めていきたいと考えている。白水菜より味がはっきりしていて、おいしい。コマツナやホウレンソウは差別化が難しいため、まだ他のところで取り組まれていない品目ということで差別化したい。</p> <p>□委員会では農業従事者の所得が低いことが議論にのぼる。代表の報酬や従業員の給与はどのように決めているのか。</p> <p>■代表の報酬に関しては、前年の利益から税理士と相談して決めている。法人の代表になっているので後から変更ができず、賞与も払えない。農場長のようなポジションの従業員に対しては、会社の経営とともに少しずつ給与も上がっており賞与も払えるときは払っている。頑張っている人には働きに見合うものを払えるようにしたいと考えている。</p> <p>□社員やパート従業員の資格取得について伺いたい。</p> <p>■特に資格は設けていないが、農業外の職種から採用することが多い。教育を重視しているため、ビジネスの基本を理解している人であれば農業を教えるのも1、2年でできる。</p> <p>□農協とのつながりはあるか。</p> <p>■資材を購入したり、ビニールハウスを設置してもらったりというお付き合いはあるが、出荷に関してはごく一部に限られている。</p>
<p>主な 委員所感</p>	<p>○MOWGが目指すもの、取り組んでいる有機栽培、主にホウレンソウとコマツナを生産していることに関して、現地で代表の方から直接説明していただき、よく分かった。社員の収入については、場所の問題から具体的な数字が聞けなかったことが残念だった。また、代表は今後の千葉市の名産となるものについて、他の農産物との差別化ができる、値崩れしない等の観点から考えているとのことから、市として中心となる品目を、他産品との差別化、千葉市の気候や土壌の特性等の視点からつくっていくことが必要であり、専門家等の意見を聞きながら市内や庁内で議論していくことが重要ではないかと感じた。</p> <p>また、今年からブランド「千」に登録したとのこと、今後どうしていくのかはまだ分からないとのことだったが、何のメリットを感じて、また、何を期待しているのか等に関して伺いたかった。</p> <p>○確かな販路開拓が安定した売上げの確保につながっていると感じた。 販路拡大には有機JAS認証を活用し、イオンのトップバリュブランドや</p>

イトーヨーカドーの「顔が見える野菜。」として販売している。
今年 1 月には FarmMoWG の有機葉物シリーズとして、食のブランド「千」に認定され、ふるさと納税の返礼品にもエントリーを検討しているとのことであった。ただし単独では返礼品がコマツナ 10 束となるとうまくいかないのでは、千ブランド内での組み合わせを考えた返礼品セットを考えるべきである。

売上は 7,000 万円を超え、農業従事者の所得向上にも注力しており、1 つのビジネスモデルとして、しっかりと学んでいきたい事例となっている。

- 法人経営によって創業から 8 年で売上 8,000 万円想定ということで、農業従事者の減少を法人の増加で補えるのではないかと感じた。
また、千葉市はイオン系列があるため商品単価も上げやすいとのことであり、千葉市の農家は販路確保においては有利な面もあると感じた。
農地の確保が課題であり、農業法人を育てていくためには農地の集約化を進めなければいけないと感じた。

- コマツナとハウレンソウという限られた品目のみではあるが、確実に規模を拡大している有望な農家であり、将来に向けた展望も持っていることから、市として、他の農家にも目配せしながらもしっかりと応援していく必要があると考える。安定収入につながる 1 つのモデルとして確立されれば、有機圃場の拡大に着実に繋がっていく。

信頼を得て、今後既存農家が農業をやめる際に土地を引き受ける受け皿として認知されれば、耕作放棄地とならずにすむ。農地利用適正化推進委員ともしっかりと連携してほしい。

有機農産物を活用した給食に関して、6 月から 12 月の間でコマツナであれば、1 校ではなくもっと対応できるようになっていると伺ったので、現在よりも出荷回数や校数を増やすよう教育委員会とも協議を進めてほしい。市としても、国の補助制度などを使い、適正価格で購入してほしい。

- 有機栽培のハウレンソウやコマツナを 60 万袋も生産しており、有機 J A S 認証も取得し、今後もモデルケースとして学校給食にも広がっていくことを期待する。
従業員の所得向上、農業村という発想でコミュニティー、地域連携も考えている点もすばらしいと感じた。

	<p>○営農には広い土地や自己資金を用意しておかなければならないと受け止めた。土地探しも、農地利用最適化推進委員の協力がなければ地元農家の協力は得られない。</p> <p>○イオンやイトーヨーカドーという販路を構築しており、ビジネスの基本を行っている点、農業村という構想も末広がりだとして評価できる。市からの補助がどのように使われているのか気になる。 有機栽培へのこだわりは消費者のニーズをつかんでいる。</p> <p>○「人と地球が共に生きれる未来をつくる」という経営理念の下、農業を通じて環境問題、食糧自給率、過疎化など様々な問題に取り組んでいるとのこと。有機農業の課題である大量かつ安定的な生産について取り組まれていることを伺うことができた。</p>
<p>視察の様子</p>	

2 合同会社TheTatsukoFarm

調査目的	本市農業をけん引する農業者の理念及び経営戦略について確認するため、現地調査を行う。
視察概要	<p>1 調査項目 本市農業をけん引する農業者の理念及び経営戦略について</p> <p>2 対応者 合同会社TheTatsukoFarm 代表 達子 侑希 氏</p>  <p style="text-align: right;">【緑区平川町の圃場を見学】</p> <p>3 主な質疑応答（□：質疑、■：答弁）</p> <p>□ビニールハウスや栽培環境のモニタリング設備等の一連の設備投資にかかった費用について伺いたい。</p> <p>■ビニールハウスやハウス内のモニタリング設備に約5,000万円かかっている。また、ハウス内の高所作業車やトマトの誘引フックなどで約400万円、造成費用約300万円、井戸約250万円、排水関係約60万円で、総工費は約6,000万円である。そのほか、従業員用のトイレの整備、トラクターの購入費用など多額の費用がかかっている。自己資金で対応している状況だが、今年から徐々に回収していきたい。未来の千葉市農業創造事業補助金では初期の設備投資のうち1,800万円、国から500万円の補助金を活用している。</p> <p>□栽培環境のモニタリング、見える化を実践しており、栽培方法を修正しなければならないときにはどのように行っているか。</p> <p>■数字もちろん大事だが、経験による判断も重要である。今シーズンの失敗事例や来年に向けての対策、栽培環境の変化等を家族や従業員と情報</p>

	<p>共有する場を大事にしており、意見を出し合いながら取り組んでいる。ただ単に指示するだけでなく、目的や効果を説明することを心がけている。</p>
<p>主な 委員所感</p>	<p>○トマト栽培について、温度や水、光合成を行うための二酸化炭素の供給等のデータ管理に腐心していることが代表者からの説明でよく理解できた。また、不良品や規格外のものを極力出さないことを含め、それらを廃棄処分しないための生産物の無駄のない活用が課題だと感じた。栽培方法をレベルアップさせるためには、栽培に携わる者の意見が重要であるとの話で、市が農業者の声を共有する場をつくる等、貴重な意見を集め、それらを共有する仕組みを作ることが重要だと感じた。</p> <p>○酷暑により数か月にわたりトマトの栽培、収穫ができない状態になったとのことで、農業の不安定さが新規参入の障壁となっている。また、トマトの売上げに依存すると年間を通した安定収入が得られないこととなり、他の作物の露地栽培も組み合わせている。</p> <p>パート従業員の雇用は閑散期に合わせており繁忙期は人手不足とのこと。トマトの施設栽培においては、どのようなトマトを作るかという経営者の判断が求められ、目標設定を明確にすること、水量調整や二酸化炭素などの厳密なデータ管理等が求められ、従来の農業とは形を変えていると感じ、農政センターの教育機関としての役割が強くなっていると感じた。割れたトマトは商品にならず、トマトジュースの原料や廃棄になるものが多く、再利用先も検討する必要がある。</p> <p>○ハウスのトマト栽培で温度、湿度、二酸化炭素をデータ管理し、PDCAサイクルを回しているということで、40代以下の経営者はそのような方法を好む人が多いと思うので、農業従事者が減っても収穫量を維持するためには、データや機械を有効活用しなければならないと思った。</p> <p>廃棄されるトマトも多く、その活用が課題であると思った。</p> <p>○デジタル技術を駆使した施設栽培のモデルとして熱意を持って取り組まれていると感じた。ニューファーマー育成研修を効果的に活用した事例として、広く周知されるとよい。</p> <p>天候による生育への影響への対応をパート従業員含め、力を合わせて試行錯誤されていた。今後トマト栽培を安定させた後に、多品目に取り組んでいくと思うので、引き続きセンターと連携し、千葉市農業を盛り立てていく1人だと思う。</p>

	<p>○6,000万円の初期投資に市が1,800万円を補助など、初期投資が大変だと感じた。市の研修による知見もあり、研修の重要性を感じた。 自宅前の直売所やオンラインなど多様な販売もされており、若い方の工夫が広がってほしいと感じた。</p> <p>○新規就農には多額の費用がかかるため、自己資金を用意できないと借金して行い、返済完了には長い時間がかかる。また、ハウスの増設やビニールの張替え、農器具の購入などにも費用が発生する。従業員やパートの作業環境改善等も含め対応しなければならない。</p> <p>○光合成や水などの管理に注目した、農業の見える化といったテクノロジーを駆使しているが、本人いわく最も重要なのは目利きであるとのこと。市の補助は1,800万円、国は500万円で、あとは自己資金、回収できるのが不安である。</p> <p>○「毎日食べても、飽きないトマト」をポリシーに、温度・湿度・二酸化炭素をセンサーで感知し、健やかに育つ栽培環境のデータが見える化するなど、データを積み上げながら試行錯誤して自分が目指すトマトとなるよう日々改善していると丁寧に説明をいただいた。 広い農地が確保できない本市で成功するビジネスモデルとして、施設栽培のお手本となる農場だと思う。</p>
視察の様子	



3 千葉市農政センター

調査目的	農政センターの機能強化について確認するため、現地調査を行う。
視察概要	<p>1 調査項目 農政センターの機能強化について</p> <p>2 対応者 農政センター所長 農業生産振興課長 農政課長補佐 ほか</p>  <p style="text-align: right;">【新規施設を見学】</p> <p>3 主な質疑応答（□：質疑、■：答弁） □ニューファーマー育成研修の指導は誰が行うのか。 ■令和7年度のニューファーマー育成研修は、アドバンスコースでトマト1名、育成コースで水稲・露地野菜が2名の計3名が入校した。栽培については農政センターの農業技師及び委託している株式会社マイファームと連携して指導している。</p>
主な委員所感	<p>○今年1月からの研修生3名がハウスを利用して模擬経営を実施することで、より実践的な研修ができる環境となっている。 達子ファームと異なり、太陽光発電を利用し、よりクリーンなエネルギーで栽培しており、環境への配慮もされていた。</p>

<p>○ニューファーマー育成研修で、研修生が農政センターのビニールハウスを実際に使って栽培できる点が良いと感じた。 オランダ型の高軒高のビニールハウスもあり、様々な施設を見ることができて良かった。</p> <p>○研修施設を実際に見学させていただき、市内農家と比較することができて良い機会となった。 今後も新規就農者を育てる場としてしっかりと管理・運営を見守りたい。</p> <p>○電力によって加温するヒートポンプを使用したイチゴ及びトマト栽培の実証実験結果を確認したい。 オール電化未来型とハイブリッド普及型の違いについて、コスト面を含めどのような結果が出るのか確認をしたい。 ハウス設備について、環境モニタリングシステム、環境統合制御盤、高保温性カーテン、二酸化炭素施用器が生産性向上にどのように寄与するかを確認したい。</p>
